

分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸域生態系 (つづき)	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査結果の記述にページを割きすぎています。カムリワシであれば、調査結果として島全体での確認位置図、行動圏内部構造図、生息環境図（メッシュでなく植生図を基に作成したポリゴン）を示し、予測では改変区域図、騒音レベル図、航空機ルート図、交通量予測図などを調査結果に重ねた図を示せば十分です。そして、説明には2、3の表と数パラグラフの文章で十分でしょう。予測に使われないデータは基本的に資料編に回せばいいでしょう。</li> </ul>	<p>調査結果については、読み手の方々が現地の状況について理解が深まるよう配慮いたしました。また、予測評価に活用される必要な情報について、分析の過程を整理して記載しています。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>予測で重ね図がない。航空障害等の設置位置とカムリワシ生息エリアを重ね合わせた図、建設機械の騒音レベルとコウモリ類の生息エリアを重ね合わせた図が無いのは不親切である。</li> </ul>	<p>p6-12-195の表については、p6-12-9に図を基に計算されたものです。 コウモリ類については、予測地点が洞窟に限られていますので図面は作成していません。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>繁殖ペアと思われる1ペアのみに注目が偏重し、若い個体の調査が欠落している。採餌状況の表にもありとおり、若い個体は水田で観察されており、幼鳥は水田や干潟など平地も利用している。しかし、その調査は行われておらず、生息環境の将来を予測評価するならば、幼鳥や亜成鳥の生息との関係こそ評価しなくてはならない。</li> </ul>	<p>カムリワシに係る調査は、特に繁殖ペアに偏重して行ったのではなく、表-6.12.1.1(6)に示すように、のべ調査日数120日のうちで1152回に及ぶカムリワシの全ての行動を詳細に観察したものです。調査記録した結果に基づき、成鳥ばかりでなく、若鳥を含む全ての行動様式を表-6.12.11.(8)及び表-6.12.1.1(11)に示しています。その結果の分析から、定着個体を割り出して、事業実施区域と行動圏を接することから、最も影響を受けるとと思われる繁殖ペアに着目して行動圏解析を行なったという経緯があります。 若鳥についても図-6.12.1.1(6)及び図-6.12.1.1(21)に、親鳥の行動圏内から周辺に分散していく過程が示されており、若鳥の生息場所や利用環境について分析を行い、繁殖ペアの行動圏内部構造にその結果が反映されています。特に、若鳥や他の地域からの移動個体を含む一時的な利用場所として、図-6.12.1.1(22)に示す海岸林について工事中、供用時における影響についての予測を行っています。 しかしながら、予測結果に不確実性を伴うことから、事後調査を実施していくこととしています。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>カムリワシの行動圏構の解析には、イヌワシ、クマタカ、オオタカに対する環境省版マニュアルが使用されている。しかし、カムリワシは東南アジアの森林に生息する猛禽類であり、生態特性や行動圏内部構造が上記3種とは大きくことなる可能性がある。また、調査方法に調査人数、観測ポイントが記入されていないため、精度や範囲を正しく検証することができない。また、調査時間中のデータが取れている割合も記されていないため、見落としの有無や程度も明確になっていない。</li> </ul>	<p>調査・解析手法としては環境省の「猛禽類保護の進め方」に準拠しておりますが、本土在の3種とは生態特性等が異なる可能性もあることを考慮し、イヌワシやサンバに関する既往の報告例も参考にするとともに、今回の調査で記録された120日、1,152回(9.6回/日)の全行動記録を分析するにあたっては、八重山諸島のカムリワシに関する既存の報告例から情報を収集・活用し、調査・解析を行っており、調査対象の繁殖ペアの行動圏や、調査対象地域を利用するカムリワシの行動特性を良く反映し、予測評価に十分に資するものと考えています。 調査範囲は図-5.2(10)に示すように事業実施区域を含む約4Km四方であり、調査地点は見通しを配慮して4地点設置しました。4人の調査者間で携帯電話で連絡を取り合い見落としのないように留意しました。ご指摘の調査地点については評価書段階でp5-71に記載します。</p>